

国語科研究部会

I 研究テーマ

自ら学ぶ国語科学習のあり方

II 研究テーマ設定の理由

本部会では、子ども一人一人に「生きる力」を育成するためには、その基盤となる国語科の中で、自ら課題を見つけ、その課題に対して自分なりに解決方法を考える力や、考えようとする意欲を育てることが肝要であると考えた。そしてこれはとりもなおさず「自ら学ぶ力」を育てていくことにつながるものであると考えた。

実際の授業研究を大切にしながら研究を深めることとあわせ、その実績を積み重ねることの意義も大きい。こういった意味から継続して同じテーマでの研究を実施していくことが必要であると考え、本部会においてはここ数年同じテーマによる研究をおこなってきている。

III 研究経過と研究内容

国語部会（小学校）は、ここ数年、作文班・読解班の2班で構成され、指導方法の研究・授業研究を通して「言葉の力」をつけるための実践について研究を行ってきた。会員は、研究したい内容により「作文」「読解」のいずれかの班に所属し、研究を深めてきている。

本年度も、4月の部会研究会において、このかたちで研究を進めることを確認し研究を行ってきた。

研究経過については、以下の通りである。

- 4月11日 部会の組織づくり（役員・研究テーマ・班別研究テーマと研究計画の決定）
- 5月14日 研究計画の検討
- 6月18日 各班の研究（レポート提案・研究授業に向けた指導案検討など）
- 7月31日 各班の研究（レポート提案・研究授業に向けた指導案検討など）
- 8月16日 各班の研究（レポート提案・研究授業に向けた指導案検討など）
- 9月 3日 各班の研究（レポート提案・研究授業に向けた指導案検討など）
- 10月 1日 活動内容の報告と代表者のレポート提案・県教研代表レポートの決定
作文班 大里小学校の実践 ， 読解班 附属小学校の実践
- ※ 10月26日・27日 県教研集会参加（北巨摩地区）
- 11月 5日 県教研還流報告
- 1月21日 小中合同学習会

テーマ「『語り手』問題を『単元を貫く言語活動』に代入する」

講師 山梨大学教授 須貝千里先生

本年度のまとめと来年度の研究の方向性についての協議 など

読解班 活動報告

1 研究テーマ 「自ら学ぶ国語科学習のあり方」

2 研究の方向性

- ①子どもたちに身につけさせたい力を明らかにし、それをもとにした実践を持ち寄る。
- ②レポート発表者の実践について研究討議を行う。

3 研究経過

- 第1回 (4/11) 組織作り 方針の決定 研究テーマの確認
- 第2回 (5/14) 年間活動計画作成 授業研究についての検討
- 第3回 (6/18) 部会研究会 県境研レポートについての検討
- 第4回 (7/31) レポート提案① 甲運小 山城小 北新小
授業研究報告 附属小
- 第5回 (8/16) レポート提案② 中道北小 伊勢小
授業研究報告 附属小
- 第6回 (9/ 3) レポート提案③ 千塚小
授業研究報告 附属小
- 第7回 (10/ 1) レポート提案④ 池田小 大里小
授業研究報告 附属小
- 第8回 (11/5) レポート提案⑤ 舞鶴小 中道南小 及び 県教研還流報告
- 第9回 (1/21) 学習会・今年度のまとめと来年度への課題

4 実践の概要

第1 学年国語科授業実践 (附属小)

くとうじょうじんぶつのせりふをかながえて、げきをしよう「けんかした山」>

(1) 目指す言語能力

登場人物の行動や会話，挿絵をもとに，場面の様子を想像して読む力

(2) 指導計画

- 1 時間目 単元を貫く言語活動「ペープサート劇」と教材「けんかした山」との出会い。
- 2 時間目 物語のあらすじを読み取り，様子を表す言葉を考える。
- 3 時間目 プンプンメーターで山の気持ちの抑揚をとらえ，1の場面の台詞を考える
- 4 時間目 2と3の場面の台詞を考える。
- 5 時間目 3と4の場面の台詞を考える。
- 6 時間目 5の場面の台詞を考え，ペープサートを作る。
- 7 時間目 ペープサートを作り，ペープサート劇の練習をする。

8時間目 ペープサート劇の練習をする。

9時間目 ペープサート劇の発表をし、感想を交流する。

本単元を貫く言語活動として登場人物の台詞を考えてペープサート劇を設定した。

第1次（1～2時）では、既習「おおきなかぶ」の授業者が行うペープサート劇を見て、子どもたちは台詞を考えて劇を行うという目標をもった。また、挿絵を並び替える活動をして、場面意識をもち、物語のあらすじをとらえる手がかりとした。

第2次（3～6時）では、挿絵や文を根拠に山の様子を表す言葉を出し合い、意見の交流をすることで、場面の様子を想像し、山や動物の台詞を考えた。さらに、「プンプンメーター」という山の気持ちの尺度（心情曲線）を用いることで、物語全体で山の気持ちにどのような変化があるのかをとらえた。また、4人グループを作り、山1、山2、動物1、動物2の役割分担をし、まず自分の役割の台詞を考え、次に山同士、動物同士の交流、最後にグループで交流という3つのステップを場面ごと行うことで、登場人物の気持ちを読み取れるようにした。ひとつの視点人物に役割を限定することで、場面が変わるごとにどのように気持ちが変わったのか、物語全体を通した読みの力をつけることにつながった。

第3次（7～9時）では、第2次までに読み取ったことをもとに、グループでペープサート劇を行った。ペープサートを考えた台詞に合わせて動かすことで、学習してきた成果を楽しみながら劇を行った。

5 成果と課題

<成果>

- ひとつの視点人物に限定したことで、読みが深まり、違う登場人物の様子をとらえることにもつながった。
- ペープサート劇では、場面ごと声の大きさを変えたり、山の動きを変えたりすることで、物語の情景を表現することができた。
- 単元を貫く言語活動をペープサートに設定したことで、様々な場面を通して思考力・判断力・表現力を育成することができた。

<課題>

- 個人で台詞を考えたものをペアやグループで話し合う活動の中で、1年生の発達段階において、1度考えてしまうとその思考から抜け出して他の考えを受け入れることはやはり難しい面があった。これからペアやグループでの「学び合い」の経験を積み重ねることで、柔軟に考えを変えられる授業づくり、学級づくりに取り組むことが大切である。

作文班 活動報告

1 研究テーマ 「子どもの意欲を高める作文のステップ 自ら学ぶ国語科学習のあり方」

2 研究テーマ設定の理由

今年度は一つの授業を提案者とともに作り上げることを通して研究テーマに迫ろうとした。まず、授業提案者から学級の子どもの実態を聞くことから出発した。具体的には、これまでの学びの履歴、書くことに関する力で身につけた力、指導の経過などである。そして、子どもの実態に合わせて計画をたてていった。子どもの「なぜ」「どうして」を出発点に授業を展開していくという流れと、日常的に行っている日記活動の成果を活かしてという点を踏まえ、「意欲をもって」「自ら」というワードを含めたテーマを設定した。

3 研究方法

- ・子どもが意欲をもって学び、自ら進んで書く力をつけるための、教材や指導方法等の開発を行う。
- ・提案授業の計画、実践、反省までの研究討議を行う。

4 研究経過

第1回（4. 1 1）組織作り・方針の決定・研究テーマの確認

第2回（5. 1 4）年間活動計画の作成・提案授業者の決定

第3回（6. 1 8）提案授業の計画検討

第4回（7. 3 1）提案授業の報告、検討協議

第5回（8. 1 6）提案授業の研究報告の分析、検討

第6回（9. 3）レポート作成に向けた検討会

第7回（10. 1）部会全体会への研究報告

第8回（11. 5）県教研還流報告

第9回（1. 2 1）今年度のまとめと来年度への課題・講師を招いての学習会

5 実践の概要

第3学年国語科授業実践（大里小） <報告する文章を書こう「気になる記号」>

(1) 目指す言語能力

友達に報告する文章を書くために必要な事柄を調べ、示された構成に沿って段落を意識して文章を書く力。（書（1）ア・イ）

(2) 指導計画（全12時間）

指導の段階を以下に示す。

- ① 集めた記号を紹介し合う。（事前指導において調べてきたものを扱った）

- ② 集めた記号から、さらに調べてみたいものを1つ選び、ワークシートにまとめる。
- ③ 学校のPC室で、インターネットを使って情報収集をする。図書館の図鑑も活用する。
- ④ 組み立てメモ作成の練習をする。
- ⑤ 組み立てメモを書く。
- ⑥ 組み立てメモを仕上げる。
- ⑦ 清書の練習をする。
- ⑧ 清書を書き始める。
- ⑨ 清書を仕上げる。
- ⑩ 互いに作品を読み合い、感想を伝える。

6 実践の成果と課題（主なもの）

- 組み立てメモ作成の際、1時間目に配ったワークシートの一言メモ（気づいたこと・なぜ・どうして）を参考にさせることで、スムーズに書き込むことができた。
- 組み立てメモや清書を書く前に、同じ題材を基に一斉に練習したことで、それぞれの作業に入る際、書き出せずに止まってしまうという児童が見られなかった。書き方を具体的にイメージすることができたからだと考える。
- 感想の書き方を練習する。調べたことや分かったことに触れながら考えをまとめたりすることをつかませたい。
- 調べたことを引用する際は文をそのまま載せたい。勝手にまとめたり要約したりはできない。ただ、どこまでが引用で、どこからが自分の考えなのかをはっきりさせること。

7 作文班の研究のまとめとして

- 今年度は授業提案者の報告をもとに、全体で検討するという形をとった。結果、一つの指導案を班全体で練り上げていくという、一つの学級の取り組みではなく、作文班の実践という色合いを出すことができた。
- 日頃ともに生活している担任から見た子どもの実態から、それに適したアプローチの仕方を全体で検討したことで、多様な見方・考え方がプラスされた指導計画が作成できた。
- 子どもに書かせる前段階で、丁寧な準備を加えることで、書き出しがスムーズになり、個別指導の時間が、より効率的に活用できた。
- 子どもの「なぜ。どうして。」という疑問、感心、興味を出発点に展開していくというテーマを設けたことで、単元で取り扱う課題の対象の幅を広げることにした。結果、進んで調べ、書き進める子どもたちの姿が見られた。
- 「報告する」というめあてのもと、友達に教えることを意識して書くことができた。相手意識をもって取り組むことができた。
- 作文班の人数が少ないので、今後の研究方法について討議が必要である。

今後も、目の前の子どもの姿を鑑みながら授業の計画をたて、全ての子どもたちに確かな書く力を身につけられるような指導や評価等のあり方を追究していきたいと考えている。